

# 人は如何に生きるべきか（その 15）

## （人生四大期・続）

一般財団法人 電子科学研究所

辻 本 忠

### 1. はじめに

本章は前章の続編である。まず、はじめに「人生四大期」の考えの基本となった先人達の人生論について述べ、その後、「人生四大期」のまとめを行なった。最後に「人生四大期」の自我期になれば山に捨てられる、姥捨て山のお話を追加した。

### 2. 先人達の人生論

#### 2. 1 式年遷宮

伊勢神宮では第 62 回新宮式年遷宮が行われた。持統天皇の御代から 1300 年にわたって続く「式年遷宮」とは 20 年ごとに新しい社殿を造営されるものである。その中で最も重要な、ご神体が旧正殿から新正殿に移される神事「遷御（せんぎょ）の儀」が、内宮は 10 月 2 日に、外宮は 10 月 9 日に行われた。

20 年毎に「式年遷宮」が行われる目的の一つに建替えの技術の伝承がある。建築を実際に担う大工の技術は 20 年毎にその役割が変わって行く。

- ・ 10 歳代から 20 歳代 20 年間 見習いと下働き
- ・ 30 歳代から 40 歳代 20 年間 中堅から棟梁
- ・ 50 歳代以上 後見人

このため、20 年に一度の遷宮であれば、少なくとも 2 度は遷宮に携わることができ、2 度経験すれば技術の伝承ができる。

最近のサラリーマン社会では技術というものがあまり必要でなくなってきた。一定の知識があればマニュアル通りに行えばすべてが上手くいく、マニュアル社会になっている。一人の技術よりグループの協調が大切な社会になっているが、最近になり個人の技術も見直されるようになってきた。

#### 2. 2 インドの四住期

本稿「その 6」で古来インドの「四住期」という思想について述べた。「四住期」とは人生を 20 年づつ「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」の節目にわけ、それぞれの時期の生き方を教えたものである。

(1) 学生期：師匠に仕えてマヌの法典（バラモン教の根本聖典）を学び人生の生き方を教わる時期で20歳まで、次の「家住期」で主人になるための教育を受ける。

・日本では大学を卒業するのは22歳である。成人式は20歳で、日本の現状に常に近い。また、「人生四大期」の「学習期」に該当する。

(2) 家住期：結婚して子供を作り、仕事をして働き、家の主人として君臨する時期で20歳代から30歳代までの20年間である。

・我々が考えている発展期に相当する。

(3) 林住期：家督を息子に譲って森林に入り、隠居生活をする時期で、雑念を制して森林の中で自己を見つめて自然な暮らしをする時期である。しかし、完全に孤立するのではなく、家との間を適当に往復する事が出来る。この時期は40歳代から50歳代までの20年間である。

・我々の考えている「熟成期」と「自我期」の中間的な時期である。しかし、現在は森林に入り、隠居生活をするような悠長な事を言っておられない。次の世代を見据えて頑張らなければならない「人生の午後3時」に該当する時期で、3時の休憩からひと仕事しなければならない。

(4) 遊行期：家も家族も、世の中のあらゆる執着を捨て、天蓋孤独で放浪の旅にでる時期で60歳より死ぬまでである。この時期は旅にでて求道生活に没頭する時期である。

・これは我々の「自我期」に相当するが、現在は60歳定年が65歳に延長されようとしている。そして、引退して、気楽に過ごそうと思っても、なかなか思う通にならない。特に、仕事人間の男性は「自我期」で自由な時間を与えられても、退屈で時間をもてあまし、その行く末は介護されるようになり、最後には痴呆に襲われて、世の中の邪魔者になってしまう。再生医療時代の到来が待たれる。

## 2. 3 孔子の教え

春秋時代の孔子が弟子達に話した言葉の一つに次のようなものがある。しかし、孔子時代の年齢は「二倍年暦」といわれているので、現在の年齢と比較するのは難しいが、強いて比較すれば年齢を1/2にすればよい。孔子時代も現在も、それぞれの時期の生き方はあまり変わっていないようである。

(1) 私は十五歳で学問に志し、

・「二倍年齢」であるので、7～8歳より学問を行うことになる。日本の義務教育の小学校の入学が6歳からであるからほぼ同じである。

「人生四大期」の「学習期」に相当する。

(2) 三十になって独立した立場を持って、四十になってあれこれ迷わず、

・15歳で自立し、20歳で人生の事が判るようになる時期である。

「人生四大期」の「**学習期**」に相当する。

(3) 五十になって天命をわきまえ、六十になって人の言葉が素直に聞かれ、

・25歳になって、世の中の事がわかり、30歳になって人の言われていることがわかるようになってきた。「人生四大期」の「**発展期**」に相当する。

(4) 七十になると思うままに振舞ってそれでも道を外れないようになった。

・35歳になれば自分の思う通りに行ってもよいが社会より逸脱しないようにしなければならない。

「人生四大期」の「**活動期**」に相当する。

### 3. 人生四大期

前章「その14」では先人の考えを基にして、我々の人生を「学習期」、「発展期」、「熟成期」、「自我期」に分け、それぞれの役割について述べた。我々の平均寿命は我々を取り巻く環境によって変わっていく。我々を取り巻く環境は何らかの契機により急激に変る時期がある。我々が動物と同じような生活をしてきた頃の平均寿命は30歳前後であったと思われる。火をコントロールし、地球上を支配するようになると60歳前後に延びた。その後、医療技術、介護技術が進歩するに従い、平均寿命が90歳に近づき、その後、再生医療が行われるようになれば120歳になるであろう。

そこで、これらの節目を基にして人類が歩んできた時代を「動物時代」、「地上支配時代」、「医療介護時代」、「再生医療時代（人間改造時代）」に分類した。そして、各時代の長さは新しくなるに従い短くなっていく。「動物時代」は非常に長かったが、「地上支配時代」になれば急激に短くなり、「医療介護時代」になればさらに短くなり、「再生医療時代」は目の前に近づきつつある。現在、我々の平均寿命は80歳で、「地上支配時代」の末期で、「医療介護時代」に入りつつあるが、次の「再生医療時代」を迎えるのはそう遠くはない。

現在の「人生四大期」を「学習期」、「発展期」、「熟成期」、「自我期」に分類し、それぞれ20年毎に区分した。「発展期」と「熟成期」は社会に富みをもたらす「活動期」で、「学習期」と「自我期」は「活動期」に支えられた「従属期」である。「発展期」には次世代の人材を育成しなければならない。「熟成期」には「自我期」を支えなければならない。現在の「自我期」は60歳からである。これが一般社会の定年になる。現在の定年は60歳であるが、だんだんと65歳に移りつつある。これは「地上支配時代」から「医療介護時代」に移行しつつある現れである。「医療介護時代」にはいけば、定年は70歳近くになり、さらに、「再生医療時代」になれば90歳になる。即ち90歳まで働かなければならない。そして、90歳を過ぎて120歳までの間の30年間は「自我期」で、思いのままに過してもよいが楽園のような快適な生活が送れるであろうか。「従属期（学

習期・自我期)」を支える「活動期（発展期・熟成期）」の負担は益々大きくなる。そのため、責人の重い「活動期」をより効果的に行うためには、「発展期」の予備軍である「学習期」の人達に対する教育が非常に重要となる。また、「自我期」でよき人生を送るためには「熟成期」の役割は非常に大きくなる。

前章では、これら各時代及び各期をシグモイド曲線で表したが、本章では一覧表として表 1 に示した。シグモイド曲線は正規累積分布である。しかし、現実には超少子高齢化社会であり、段階の世代の人達が高齢者の仲間入りをするため、人口に対する年齢分布はピラミッド型ではなく中高年で膨らむ太鼓型の複雑な分布となる。そのため年齢に対する累積社会貢献度は理想的なシグモイド曲線にはならない。そのため「人生四大期」を等分に分類することには無理があるようである。

そこで、「人生四大期」の考えはそのままとし、各期を年齢で均等に区分するのではなく、人の意思によって自主的に決めるようにする。そして、「活動期」には女性、若者、意欲ある者すべての者が活躍する全員参加型にしなければならない。また、「自我期」も前期と後期に分け、前期は「熟成期」の仲間入りし、後期は道を外れない範囲で自分の思うままに振舞ってもよいが、病気や痴呆に襲われる恐れがあり、そのようになれば世の中の邪魔者扱いになる、そして姥捨て山に捨てられるかも知れない。早く「再生医療時代」に入り、地上の楽園が訪れるような社会にしたいものである。日本は世界に類を見ない理想的な社会主義国になり、地上の楽園が訪れることを願うものである。

注) 前章 (その 14) では「再生医療時代」を「人間改造時代」と記載したが、ここでは「再生医療時代」とした。

#### 4. 姥捨て山

日本のある地方で食糧事情の乏しかった頃、貧しい村では一定の人数しか養う事ができないので、年老いて働けなくなった者は口減らしのために、山に捨てるような村の掟があった。村の掟に背くと家族は村におれなくなる。姥捨て山に捨てられる年齢は 60 歳と言われている。

##### 4. 1 姥捨て山のお話

若い農夫は村の掟に従って、母親を籠に乗せて、姥捨て山へと向かっていった。ところが、その道すがら、背中に負わされた母親が、しきりと木の枝を折っては道々に捨てていくのです。これを見た若者は母親が山に捨てられる恐怖心に耐えかねて、この落とした枝をたどって家に帰るつもりではないかと思った。とうとう母親を捨てる場所に来た。息子は母親を背中より降ろし、別れをつけて帰ろうとした。その時、母親は息子の袖を捕えて言うのです。「いよいよお前との一生の別れじゃ、身体に気をつけるんだよ、ずい分山奥まで入ったか

ら、お前が家に帰るのに道に迷っては困るだろうと思って、私が来る道すがら、小枝を落として目印をしておいたから、それを頼りに無事、家に帰るんだよ、そして、立派に跡をついておくれ」そう言って、母親は息子に手を合わせるのです。その母親の姿を見て若者は泣きくずれました。(奥山に枝折る葉は誰がためぞ、親を捨てんと急ぐ子のため)。母親は自分の事は一切顧みないで、ひたすら我が子が無事に家に帰るかどうかだけを心配している。このまま、山に捨てられた老人はそのうちに凍え死ぬか、そうでなくても数日中には餓死するでしょう。こちらは母親を捨てようとしているのに、母はこちらをこんなに憂(う)いている。このような母をどうして捨てられようか、息子は思わず知らずに、草むらに両手をついて「どうかこの籠にお乗りください、これから我が家にお伴して、一生お仕えいたします。」と言って、再び母を背負って山を降り、裏の納屋の奥に隠しました。その後、殿様は村人に「灰の縄を作るように」いいました。村人は誰もできません。これが出来ないと年貢が高くなります。その話を息子は母親に話しますと、母親はそれは簡単だよ藁縄の輪を作り、それを塩水にいれ、乾かして燃やさない。

次にまた難問が殿様からきました。一本の棒である。どちらが根のほうで、どちらが枝の方かといわれました。母親に聞きますと、水の中に入れて、下にある方が根っこで、浮いている方が枝であるといいました。次に叩かなくても音が出る太鼓を作るようにい~~え~~われました。これも母親に相談いたしました。母親は太鼓の皮を緩めて、蜂を太鼓の中に入れてました。太鼓は音を立てはじめました。殿様は知患者そろいの村人に感心して、年貢を上げる事をあきらめました。また、村人も60歳以上の年寄を姥捨て山に捨てる事をやめ、その後年寄を大切にするようになりました。というお話です。

#### 4. 2 年寄の知恵

年寄には若者のように体力はないが、長年生きしてきた経験がある。老人には老人の役割分担があると言いたいと思う

この時代は60歳まで生きる人は少なかったかもしれない。女性は男性より長生きする。そのため、60歳以上になって生きているのはほとんどが女性であったのかもしれない。そのため、姥捨て山の姥は老女になっている。

この話は親は何時までも本能的(古脳)に子供の事を思う。ところが、子供は親の事を思う本能はない。そこで、社会を上手に動かして行くために、生まれてから成長する新脳に親の大切さを教育する。しかし、生まれてから教えこまれる新脳は社会環境によって変わって行く。そこで、子供が小さい時に「親に孝行」する道德教育が必要である。最近道德教育が行われていないようである。

この物語の言わんとしている事は年寄にも年寄の役割があり、年寄を大切にしないという事であると思う。

表1 各時代の年齢比較

年齢(歳)	動物時代 (0~30歳)	地上支配時代 (0~60歳)	現在 (0~80歳)	医療介護時代 (0~90歳)	再生医療時代 (0~120歳)	
0~20歳代	学習期 (7.5年)	学習期 (15年)	学習期 (20年)	学習期 (22.5年)	学習期 (30年)	
	発展期 (7.5年)					
	熟成期 (7.5年)	発展期 (15年)	発展期 (20年)	発展期 (22.5年)		
	自我期 (7.5年)					
30歳~50歳代		熟成期 (15年)	熟成期 (20年)	熟成期 (22.5年)	発展期 (30年)	
		自我期 (15年)	自我期 (20年)	自我期 (22.5年)		
60歳~80歳代				自我期 (20年)	自我期 (22.5年)	熟成期 (30年)
90歳~120歳						自我期 (30年)